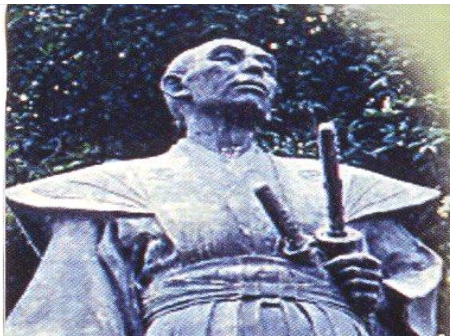


横井小楠

—その業績と生涯—



京都で始まった戊辰戦争の戦況は北海道箱館へ移り、京都市中は次第に平穏になってきました。そこで、大名のように多くの供廻りを好まぬ小楠は、役所への出退勤の護衛も人数を著しく減らし、門生も2人ずつの交替制にして離れて随伴するように指示しました。



▲小楠殉節地(京都市中京区寺町丸太町)

23 小楠 凶刃に斃れる

明治2年(1869)1月5日の午後、京都御所近くの寺町丸太町で1発の銃声が鳴り響くのと同時に、覆面をした6人の刺客が、通りかかった横井小楠の駕籠に襲いかかりました。

小楠は、前日の年明けの初出勤と同様、当時は国の役所があった京都御所に朝から出仕し、退庁をしたのは午後2時過ぎでした。彼の駕籠は寺町御門より御所を出ましたが、ここから寺町通を南下すれば住居までの道のりは僅かでした。駕籠脇には京都で雇った越前生まれの若党2人(松村・上野)、駕籠から離れて従っていたのは当日の護衛番で門生2人(横山・下津)でした。前夜までに手筈を打ち合わせていた刺客(上田・土屋・前岡・中井・鹿島・柳田)たちは、御所近くの築地の陰で小楠の退出を窺っていました。駕籠が丸太町の角を通り過ぎた直後、上田が駕籠に向かって発砲し、それを合図に6人が駕籠を目掛けて斬り込んだのです。不意を食らって駕籠脇が乱れた瞬間、刺客の中井は右から、上田は左から、駆け寄りざまに一刀を駕籠に突っ込みました。異常な雰囲気を感じた小楠は素早く駕籠から抜け出し、短刀を引き抜いて身構えると、駕籠の周囲は敵味方の白刃が閃き、たちまち乱戦の修羅場となりました。

駕籠脇に初めから居た松村は必死になって防ぎましたが、右腕を深く斬られ、上野は銃声を聞き一、二歩踏み出した途端、背後から一刀を横腹に受け、振り返るところをまた一太刀浴びてしまいました。離れて従っていた横山と下津も銃声に驚いて駕籠に向けて駆け出しましたが、複数の刺客が2人に斬りかかりました。下津はそのうちの1人の肩に深手を負わせましたが、門生の2人は小楠に近寄ることができません。このような中で小楠は、駕籠を後ろ楯に四方より

迫る敵を短刀1つで支えていましたが、病身の老体では思うに任せず、幾太刀も浴びたうえに横合いから斬り込んできた一撃に倒されてしまいました。

刺客の鹿島が小楠の首級をあげて丸太町を西に走ると、ほかの仲間もその後続いたので、横山と下津はこれを追跡しました。この時、韋駄天のあだ名を持つ若党が急を聞いて現場に駆けつけ、刺客の後を追いかけて小楠の首を奪い取りました。その間に刺客は何処ともなく逃げ去りました。時に小楠は61歳でした。

事件後、直ちに京都の要路は封鎖され、犯人の探索が行われました。その結果、犯人は頑固な保守攘夷派の志士とわかりました。また、小楠暗殺の動機は、開国論者横井小楠が新政府で重要な役割を果たしていることへの反発、さらに「天主教※を国内に広げようとしている」ことでした。しかし、小楠は、「耶蘇教が国内に入れば、仏教と宗旨(主義・主張)争いが起こり、乱を生じる」(『沼山対話』)ことを懸念しており、刺客たちは誤解に基づいた風説を真に受けたものと思われます。

小楠の遺骸(なきがら)は京都南禅寺天授庵に埋葬され、後に沼山津の小楠公園に遺髪が葬られました。小楠公園では毎年、1月5日を新暦に直した2月15日に小楠墓前祭を行っています。

※天主教…キリスト教の呼び方のひとつ。耶蘇教も同じ。



▲小楠墓地(京都市左京区南禅寺)



▲小楠墓前祭(小楠公園)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。